

## 6 「新出の刺絡専門書『痧脹晰義』について」の続報

池内早紀子

大阪府立大学人間社会システム科学研究科

『痧脹晰義』（1800年頃成書）は、会津藩医の児島宗説（1740-1811）（沖夫・号、楊阜・惟翻・翻）の著作である。この書は清の郭右陶『痧脹玉衡』（1723年和刻）に触発されて著された、刺絡の専門書である。前編に「痧論」を初めとして理論や治法をのべ、後編で8例の臨床治験例を挙げている。2015年、長野仁氏によりこの筆写本が発見され、第117回日本医史学会学術大会において報告された。今回、『痧脹晰義』の内容をそのまま継承し発展させ、補訂を加えた書とも言うべき『痧病新書』が、長野蔵書の中に存することが判明したので報告したい。

宗説は会津藩侍医頭であり、藩校日新館医学寮創設に当り、教科書を制定したとされる。『国書総目録』に、宗説の著作として5書が収録されているが、そこには『痧脹晰義』は含まれない。現在その所在が確認できるのは、京大富士川・杏雨・内藤くすり大同所蔵の『古医方晰義』と長野所蔵の『痧脹晰義』の二書である。

さて今回、新たに確認できた加賀山翼（1818-1871）、『痧病新書』もまた、長野氏が入手したもので、複写製本をしたもののようである。加賀山翼は「幕末の会津藩蘭医。若松城下藩医の児島雲琳の次男に生まれる。同藩医、加賀山太沖盛俊の養子となる。幼名岩松、通称潜竜、号は仁山。（『三百藩家臣人名事典』）」とある。『古医方発蒙』、『古今大眼』、『痧病新書』、『昆刺地格烈刺篇』の著作がある。『痧病新書』は「痧病の原因、症状、治療法を詳述。血液病理説で、治療法は第一に瀉血法にあり」と説く、『昆刺地格烈刺篇』は「江戸にコレラが流行し医家施術を知らざるを見て蘭書を江戸藩邸にて翻譯したもの」（友田康雄『日本医史学雑誌』5巻1号1941年）と記す。児島雲琳は宗説の子で藩医でもある。宗説口述の『古医方晰義』を筆記した。

さて当該書の概略であるが、表紙に外題「痧病新書 完」とあり、自序3葉、巻一24葉、巻二13葉からなる。外題に「完」と附されるが、巻末は、「又入門云凡癩証方萌起耳後高骨間必有青紋紛々如線見之急為爪破須令血出啼叫尤得氣通ト是等合考へ急ニ臨テ宜ク治ヲ施ヘシ（又た『入門』《李梴『医学入門』》に云う、凡そ癩証方に、萌（きざ）し起れば、耳後高骨の間、必ず青紋有り。紛々として線の如し。之を見れば急に爪もて破ることを為し、須らく血を出だしむべし。啼叫して尤も氣通ずることを得ん、と。是れ等、合わせて考え急に臨みて宜しく治を施すべし）」で終わる。跋文などはなく、ここで終わるのは不自然なため脱簡の可能性がある。自序に「安政六次己未歳六月」、「和田倉官邸」、「單山高有常書」とあるので、1859年に江戸の和田倉御門内の会津藩上屋敷で著され、田安家に仕え徳川家達に書を教えた書家滝沢有常が清書したとわかる。さらに巻一、巻二は、各々『痧脹晰義』の前編、後編と対応し、同一の文章が散見する。自序に「去歳天下齊病虎狼瘡濱海之地死者最多（去歳天下齊しく虎狼瘡を病む。濱海の地死者最も多し）」や「余間奉命檢之諸家亦徵之病者作痧病新書。（余、間に命を奉じ、之を諸家に檢し、亦た之を病者に徵し、痧病新書を作る）」とある。安政5年（1858）清国でコレラに感染したアメリカ軍艦ミシシッピ号の乗組員により、コレラが長崎に上陸、全国的に大流行した（『日本コレラ史』）。これらより幕末の混乱期に発生したコレラ禍に対処するべく、未刊の草稿であった祖父・宗説の『痧脹晰義』の臨床例には無かった患者名を記すなどの加筆し、自著としたのであろう。この書は刺絡の書だが、西洋医学における治療法も瀉血を用いたとする（『コレラの世界史』）。蘭書を翻譯したという『昆刺地格烈刺篇』との関連は、江戸・明治期の医学のパラダイムシフトを解く手掛かりとなると思われる。